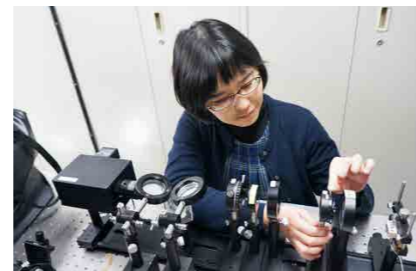


TOPICS

大学院工学研究科知能機械システム工学専攻博士後期課程1年生の川嶋なつみさんが、第11回HOPEミーティングの参加者に選ばれました。

ノーベル賞受賞者等と1週間の合宿形式で、世界各国の学生達とともに語り合います。日本国内からは25名しか選ばれない栄誉です。HOPEミーティングは、自然科学系ノーベル賞受賞者等の世界の知のフロンティアを開拓した人々と、アジア・太平洋・アフリカ地域から選抜された優秀な大学院生等との対話の場です。同世代の研究者との交流、さらには人文学・社会科学分野の講演や芸術プログラムを通じて、より広い教養の涵養と人間性の

陶冶を図ります。将来の同地域の科学研究を担う研究者として飛躍する機会を提供するため、平成19年度から開催されています。応募対象者は、博士後期課程学生と博士の学位取得後5年未満の若手研究者です。川嶋さんは、博士後期課程1年次から研究奨励金を受けられる難関の日本学術振興会特別研究員DC1に採択されています。2019年3月4日～8日の期間、100名の博士後期課程の学生とともに、沖縄で合宿形式で密に議論を行います。



香川大学イノベーションデザイン研究所設立記念シンポジウム「産学共創のあり方を考える」を開催

12月13日、かがわ国際会議場で香川大学イノベーションデザイン研究所設立記念シンポジウム「産学共創のあり方を考える」が開催されました。算学長の開会挨拶に続き、来賓挨拶のあと、富士通(株) デジタルフロント事業本部部長柴崎辰彦氏による基調講演がありました。テーマは「デジタルビジネスと

社会課題に挑む～実践の5つのポイント～」。さらに香川大学イノベーションデザイン研究所所長でもある片岡郁雄理事から「香川大学の産学連携の取組みとイノベーションデザイン研究所の概要」の紹介のあと、テーマ「産学共創において大学の果たすべき役割」としてパネルディスカッションが行われました。



CIRCLE



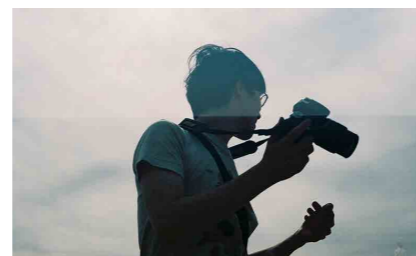
会計学研究会

会計学研究会という名前なので、どんなサークルか想像しにくいと思いますが、みんな優しくて面白い人ばかりです！簿記の勉強だけでなく、夏旅行やBBQといった様々な楽しいイベントがあります！よろしくお祈りします！！



卓球部

私たち卓球部は試合や遠征だけでなく卓球関係以外の行事もたくさんあります。現在、空前の卓球ブームとも言われ、卓球人口も増加しているので卓球に少しでも興味のある人はぜひ来てください！



医学部 写真部

こんにちは。当部活は創部4年と歴史の浅い部活ですが、医学部祭での写真展をはじめとして、附属病院での展示、医学部HPや、会報の表紙などに写真を使っていたりまで成長しました。普段はゆったりとした雰囲気の中で楽しく活動しています。

香川大学では今後、全学でデザイン思考教育を取り入れていきます。ところで「デザイン」とは何でしょう？ そんな疑問に、創造工学部創造工学科造形・メディアデザインコース10人の先生方に、「デザイン」と「お一人ずつ決められたテーマ」をかけて、語っていただきました。(3回目/10シリーズ)

DESIGN×SKILL

創造工学部創造工学科造形・メディアデザインコース准教授
後藤田 中

今回は、DESIGN×SKILLとして、人のスキルを育て、スキルを持つ人をボトムアップ的に増やす観点を考えてみたいと思います。「スキル」という言葉を耳にされた方は、ドイツ等に存在する高等職業能力資格の認定制度である「マイスター」を想像するかもしれませんが。日本に目を向ければ、漆器、織物、和紙、仏具、陶磁器等…数えきれない伝統工芸士が認定されています。人のスキルを定義することによって、その手で作られる製品の品質・価値としてのブランドが保証されます。もっと大事なことは、一連のスキルを定義、評価、認定を通じて、「モノ」だけでなく、人が評価され、その人をはぐくんだ地域、思想、環境、文化、歴史の評価再評価につながっていくことに他なりません。

今現在の高度なスキルを持つ人たちをどう守るか？の話であれば、話はここで終わってしまいます。では、育てる側はどうでしょうか？ 恥ずかしながら、今私が、研究で行っている熟達者の巧みなスキルを解析し、初学者へどう上手く伝えるか…という支援は、入口の中のさらに入り口にすぎません。高度なスキルを持つ人は、スポーツという中の、例えば野球におけるイチローや大谷のような存在で、長い時間の流れで得難き存在であり、長い時間の中で見れば一瞬の光にすぎません。なかなか、そのレベルまで到達するということは、残念ながら技術的にも時間的にも実現できていない状態です。そもそも地域や環境こそが、人の育成の本質ではないかと考えています。「定義」、「評価」、という言葉を使っている時点では、まだまだ「育てる」というボトムアップまで辿り着けておらず、通過点としてのトップダウンな取り組みの一部だと気づかれます。

さらに、仮にスキルに関する情報の伝達・獲得によって、素晴らしい後進が引き続き生まれたとしても、現実的には、先人の偉大な功績の陰に隠れ、本来の正当な評価をいただけないかもしれません。そのような状況を、本人以外の力で何とかしてあげないと、後進の育成は、難しくなってしまいます。つまり、一番育てる上で大事な、応募者、希望者としてのスキルを継承しようとする弟子がまったくいなくなってしまいます。人がいなくなってしまうと、そもそも育てるという概念はなくなってしまふ悲惨な状況になります。これは、地域に例えると、観光者、移住者といった経済的なリソースが

なくなってしまうことに相当しています。いかに優れた人も、経済的に成り立たなければ、生きていけない…。これは、優れたスポーツのアスリートも、選手引退後にまったく活動できなければ…という点に近いと考えており、伝統技能やスポーツ競技というスキルを取り扱う中で、その垣根を越えて共通の課題に捉えています。

目指すべきは、スキルを持つ人、育てる人のまわりで、地域が活性化すること。経済的には、その地域で、お金を落としてくれる人が増え、スキルを持つ人、それに関係する人々が経済的にも自立し、生活できること。願わくば、そうした後継者が地域を支えること、力の源となれるよう、「コト」としての仕組みが創出・整備されることが重要であり、それがまさにボトムアップ的なスキルを持つ人を増やす取り組みだと考えています。

さて、今現在、東京オリンピック2020が近づいてきており、幸いにして、ここ数年、AIやIoT、ビッグデータ等の技術的トレンドを引っ提げて、例えばデータアナリストで食べていく人なども出てくる等、スポーツ産業においてスキルをふるう人も出てきています。しかしながら、こうしたトレンドは、一時的であり、競技と関係のない地域では、直接恩恵があるわけではないと考えています。そこで、前職(国立スポーツ科学センター)の仲間たちは、オリンピックのムードに流されず、終わった後のことを考えて、沖縄で、「一般社団法人スポーツおきなわ(注)」という沖縄に目を向けた「コト」づくりに邁進しています。スポーツを地域と一体になったコミュニティとして、取り組みの視点を彼ら&彼女らは与えてくれます。

「少年老い易く 学成り難し 一寸の光陰 軽んず可からず」という言葉は人を主語として捉えがちですが、地域としても捉え、人に目を向け、スキルを持つ人を育て増やすことを考えてみませんか？

創造工学部では、「コト」づくりを実現する手段として、チームワーキング演習やロジカル思考演習、デザイン思考演習などをはじめとしたDRI教育を行っています。

(注) <https://sports-okinawa.org/>